

☆医療的ケア、母の願い（上）学校に常勤看護師を

神奈川新聞ニュース 2017/06/23

＞ たんの吸引など医療的ケアを必要とする子どもが親の付き添いなく地域の小中学校に通えるようにと、川崎市宮前区の母親が、学校に常勤の看護師を配置するよう求めている。今月5日に請願書を市議会に提出した。娘のケアのため、小学校ではほぼ一日待機する状況を改善したいと願う。ケアが必要でも地元で普通に学ばせたいという訴えだ。

母親は同区小台の小関かおりさん（48）。市立土橋小学校の特別支援学級5年生の次女リナさん（11）に、たんの吸引と経管栄養が必要なため、授業中は別室で待機している。リナさんは自分で歩くことができないため、車で送り迎えをする。

■地域で育てたい

リナさんは4歳の時、風邪をひき気道が閉塞（へいそく）したため気管切開の手術をし、以来たんの吸引している。食べ物を飲み込むのが難しく、胃に流動食を直接入れる胃ろうの管も取り付けた。

同市麻生区内の私立幼稚園が看護師を付けてくれることになり入園。就学猶予期間も含めて3年間在籍し、6歳で卒園した。

かおりさんはリナさんを地域で育てたいと、遠方の特別支援学校よりも地元の小学校に入れる道考えた。だが、看護師のいる特別支援学校ではなく公立小学校の場合は付き添いが必要になる。「それでもやろう」と決意した。土橋小学校には1年遅れて7歳で入学し、この春5年生になった。

■1日に6時間半

かおりさんは授業のある日の大半は、6時間半ほどを小学校が用意してくれた待機部屋で過ごしている。学校でたんの吸引は多い時で5回、水分補給と流動食の胃ろう注入は、授業の合間と給食の時に行う。

看護師経験のある親戚の女性が週1日、付き添いを代わってくれる。また、市の巡回看護師が学校を訪れる木曜日の午前中の3時間は手が離れる。それ以外はいつも待機部屋にいる。

リナさんは友だちと良好な関係を築いているという。最初は、たんの吸引や経管栄養に驚いていたが、障害を丁寧に説明すると仲間意識からか、よだれを拭いたり、掃除を手伝ったりするようになった。かおりさんは、他の子どもたちがケアを普通のことと捉えるようになったと感じている。

小学校生活も5年目。地元の学校で本当に良かったと確信しているかおりさんだが、将来が不安になることもある。

「自分が大病でもしたら特別支援学校へ転校させなくてはならない。4年間で培った友だち、地域の人々、先生方との絆がなくなってしまう」
…などと伝えています。

☆医療的ケア、母の願い（下）仕事就ける後押しを

神奈川新聞ニュース 2017/06/24

＞ 小学生の5年生の次女リナさん（11）の学校生活に付き添う小関かおりさん（48）は、家族の将来に不安を抱える。夫（54）は6年前に食べ物を喉につまらせ心肺停止の状態になり、いまでも意識が戻らない。実家のある茨城県内の病院に入院している。家族の収入はなく、蓄えと社会保障の手当で暮らす。

かおりさんは仕事に就くため、大学の通信教育で福祉を学び、2016年3月に卒業して社会福祉士の資格を取った。付添いの待機時間も勉強した。周囲の協力でスクーリングや現場実習もこなした。資格を生かして障害者や家族を支えたいが、今の生活では働くことができない。

公立中学校2年生になる長女（13）の大学進学の実夢もかなえたいと思っている。

■小中学校に10人

川崎市教育委員会によると、同市立小中学校で看護師の支援が必要な子どもは10人（16年度）。付き添いの負担を軽減しようと12年度から週1回90分、学校への看護師の巡回を行っている。16年度は週1回3時間（または週2回計3時間）に拡充した。

リナさんは週1回3時間の巡回で医療的ケアを受けている。もし看護師が常駐すれば付き添いをしなくてもよくなる。

現在は制度上、教員も医療的ケアができるようになった。ただ、密度の高い研修が欠かせず、大勢の子どもたちを担当する小中学校の教員が実施するのはハードルが高いとされている。同市教委指導課は「安全のために看護師によるケアがベースにする」というのが基本的な考えだ。

文部科学省の16年度調査では、全国公立小中学校で医療的ケアを受けている子どもは766人。看護師配置拡充のために同年度から補助制度を開始した。

横浜市教委は17年度、市立小学校1校への常勤看護師配置をモデル実施として始めた。国の補助を含めた年間予算は約600万円。訪問看護ステーションの看護師を派遣している。

■学校の選択を

医療的ケアを行う親を支援するNPO法人療育ねっとわーく川崎・サポートセンターロンドの小塚千津子さんは、「毎日のように付き添っては体力、気力とも限界になる。看護師がいればどんなに助かるか」と願いを後押しする。

障害者ケアに長く携わる経験から「未就学児から成人まで含めると医療的ケアを行っているのは川崎市だけで100人は超えるだろう。医療技術が進んだことで、危険な状態で生まれても障害が残る形で命をつなぐケースもあり、この7～8年でケアが必要な子どもが増えていると実感している」と指摘する。

かおりさんは「医療的ケアの必要な子どもたちに、行きたい学校を選択できる機会を与えてほしい」と願っている。請願はいま、市議会文教委員会に付託された。早ければ7月にも審査があり、採択か不採択かが決まる。

…などと伝えています。

△文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課 新着情報平成 29 年 04 月 19 日

※公立特別支援学校における医療的ケアを必要とする幼児児童生徒の学校生活及び登下校における保護者等の付添いに関する実態調査の結果について

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1384437.htm

> 文部科学省において、公立特別支援学校における医療的ケアを必要とする幼児児童生徒の学校生活及び登下校における保護者等の付添いに関する実態調査を実施しましたので、その結果について公表します。

*公立特別支援学校における医療的ケアを必要とする幼児児童生徒の学校生活及び登下校における保護者等の付添いに関する実態調査の結果について (PDF:308KB)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile/2017/04/19/1384437_1.pdf

△川崎市HP：市議会 請願受理一覧 受理番号 031～034 2017 年 6 月 23 日

<http://www.city.kawasaki.jp/980/page/0000085469.html>

>034

医療的ケアの必要な子どもが、親の付き添いなく、地域の小・中学校へ通えるように、常勤看護師の配置を願う請願

受理年月日：平成 29 年 6 月 7 日 付託委員会：文教